

日本語会話における跨拍上昇音の実態

王 曉 青

(2002年9月30日受理)

The actual condition of one syllable LH-pitch in Japanese conversation

Wang Hsiao-Ching

One syllable LH-pitch in Japanese is perceived as the first tone in Chinese, but when listening to Japanese television or radio, there are cases when this one syllable LH-pitch is perceived as the second tone in Chinese. Therefore, how should the one syllable LH-pitch in Japanese be produced? In this paper I took up 500 examples of the one syllable LH-pitch out of Japanese conversations in soaps and analyzed them.

Key words: one syllable LH-pitch, emphasis of accent, weakening of accent, form of pitch curve, the second tone of Chinese

キーワード：跨拍上昇音，アクセントの強調，アクセントの弱化，ピッチ曲線の形，中国語の第二声

1. 研究の動機と目的

日本の研究者は、早くから「交番 (こうばん)」、「懇談 (こんだん)」、「コーヒー」のような / (C)V V / あるいは / (C)V N / 型の語頭 (1, 2 拍目) が東京方言で平らに発音される傾向があることを認めている。しかし、上昇音 (例えば、コーヒー) が音韻的に正しい形と認識しているためか、この問題は音声学的現象に過ぎないと見なされ深く追求されていない。日本人がこれらの語をアクセント辞典通りに発音していないということは、辞典をよりどころに学ぶ日本語学習者にとって深刻な問題となり得る。王 (2000) では、このような / (C)V V / あるいは / (C)V N / という形の二拍一音節で構成される音韻的に上昇音となるべき発音を「跨拍上昇音」と仮称し、王 (1999, 2000, 2001) で種々の実験を行った。

王 (2001) での東京語話者14人の実験単語音読資料による分析では、語頭無声 (無声子音で始まる単語の語頭、例：コーヒー) の跨拍上昇音の上昇幅が語頭有声 (母音、半母音、有声子音で始まる単語の語頭、例：うんよう (運用)) の場合の半分に満たない (アクセント音域に対する平均比率は13% : 38%) ことが明らかになった。東京語話者の語アクセントにおけるピッチ曲線の形は、語頭有声の跨拍上昇音で“—”平坦型が23%、“∩” 拋物線上昇型が76%、“∪” 先端下降後上昇型が1%、語頭無声の跨拍上昇音で“—”平坦型が85%、

“∩” 拋物線上昇型が12%、“∪” 先端下降後上昇型が3%であった。このことから、語頭有声の跨拍上昇音のピッチ曲線の形は、主に“∩” 拋物線上昇型、語頭無声は主に“—”平坦型だと言える。しかし、“∩” 拋物線上昇型と“—”平坦型は、大体中国語の第一声のように聞こえると言えるが、実際にテレビやラジオの放送を注意深く聞いてみると、中国語の第二声のように聞こえる跨拍上昇音もしばしば観察される。このことは意図的に統制された実験文だけでなく、実際の発話や会話を観察する必要があることを示している。

本稿では跨拍上昇音をどう発音するべきか、実際の日本語会話ではどのようなピッチ曲線をしているのか、一部の跨拍上昇音が中国語の第二声のように聞こえる原因は何か、テレビやラジオの日本語で第二声に聞こえる比率はどのぐらいかという問題を考察する。そして、その結果に基づいて、日本語教育で跨拍上昇音をどう教えるべきか考えることにしたい。

2. 先行研究のまとめと本研究の立場

研究方法と研究資料を説明する前に、本研究で用いる術語に関する先行研究と本研究の立場を説明しておく。

2.1. アクセント句について

川上 (1957a) によると、句とは「強調や上昇イント

ネーションによるお飾りのつかぬ限り、その音調曲線が一つの山の形をなすような部分であり、「全体が一続きに云われて切れ目が無いという感じを与える」一つの音調的単位である。しかし、本稿は会話文中の跨拍上昇音を対象にするため、アクセントの強調や弱화를伴うので、アクセント句を「全体が一続きに云われて切れ目が無く、一つの山の形をなすような音調曲線である」と定義する。山の大小に関わらず、句頭の上昇或は前音との間にピッチの落差があれば、一つのアクセント句と認めるものとする。

2.2. プロミネンスについて

川上 (1957b) はプロミネンスを「その部分が特にはっきりと間違いなく聞き取れることを目的とする発音法の型である」と定義している。郡 (1994) は、プロミネンスとは「フォーカスの一つの音声表現」で、「フォーカスはそのような発音法を要求する原因である」と説明している。中立の発話ではアクセント句の山は規律正しく大きい山から小さい山へと並ぶのが普通であるが、「フォーカスがある語ではアクセントによる音調の山が高まり、以後の語群はアクセントの山が抑えられる」とされる (郡1994)。しかし、中立の発話の文頭におけるアクセントの山は元々高いので、プロミネンスの有無を判定するのが難しい。また「重音節ではじまるアクセント句では、第1モーラのピッチが高く、上昇は観察されないか微弱である」と前川 (1998) が指摘しており、王 (1999, 2000, 2001) で音読み単語の語頭無声の跨拍上昇音が平らなピッチ曲線をしていることが明らかになったため、本稿ではアクセントの強調を以下のように判断する。跨拍上昇音のピッチ曲線が文音域の上限附近に入り、下限の近くにある前音との高低差が激しい場合、或は弱化するべきところで弱くせず、前音と一定の高低差が見られる場合、アクセントが強調されたと判断する。文頭の場合は、一般の文頭のアクセントの山より更に高い場合、或いは後に弱化された音調の山が確認できた場合に、アクセント型の強調だと認定する。また、これ以外に音の長さや声の大きさも判定の手がかりにしている。

2.3. アクセントの弱化和語の融合について

郡 (1997) は、アクセントの弱化的大原則について以下のように述べている。「ある語が文の中で持つ意味が直前の語から限定される時、その語のアクセントは弱まる (もちろん、その語にフォーカスがある時は弱まらない)」。更に、以下のような四つの場合があると説明している。

① 名詞が、その直前の形容詞や「名詞+の」で意味を限定されている時

例：「隣の^p奥さんに駅で^p会ったんだ」(“p”は

次の語のアクセントを弱める記号)

② 述語が、その直前の副詞的成分や格成分によって意味を限定されている時

例：外国にひとりです^p出かけるのは大変でしょう。

③ 並列されていて、直前の語と意味的に一体化している語

例：「新郎と新婦」, 「兄と弟」(下線は筆者)

④ フォーカスがある語の後の語群

前川 (1998) は、語の融合について、「アクセント句はしばしば複数の語から形成される。機能的なまとまりを有する言語単位 (主語、補語、述語など) を領域として形成されることも多いが、発話の統語的構造だけでアクセント句の構造が決定されるわけではない」、「東京方言では「無核語+無核語」や「無核語+有核語」の連鎖が統語構造とは無関係にひとつのアクセント句にまとまる傾向がある」と指摘している。

語の融合について小林 (1963) も以下のように指摘している。

「東京アクセントでは、音頭の負核 (筆者注：次の音節がより高い場合、アクセント核を持つ正核に対立する概念) はすべて「消えて平らになる」性質をもち、とくに0型 (筆者注：平板型) では、負核は「消えて平らになる」ばかりでなく、高さのレベル (Pitch level) が語全体として上下に動揺する。」本稿は以上の先行研究を手がかりにして、会話文中のアクセントの弱화를以下のように判定する。

ほかに強調されたところがあるためにアクセント句の山が低く抑えられた場合、或はある語が文の中で持つ意味が直前の語に限定されたために前音と一続きに発音され高低差が小さい場合は、アクセントの弱化和判定する。前音の末尾と殆ど高低差がなく、完全に一つのアクセント句になっている場合、参考のために「融合」と印を付けるが、あくまでも弱化の一種と見なす。

2.4. 文頭のイントネーションについて

文中の跨拍上昇音は文頭と句頭のイントネーションと深いかかわりがある。ここでは川上 (1956) を参考にすることにする。川上 (1956) は以下のように文頭 (或いは句頭) のイントネーションを3種類に分類している。「↑」は上昇箇所を意味する。「↓」は音調の下降を意味する)

早上がり型 「トンデモナ'イ

並上がり型 ト「ンデモナ'イ

遅上がり型 トン「デモナ'イ

早上がり型の「無意識的用法」：びっくりした、仰天した、そして、これは何とか手を打たねば!とあわてふためく、といった感じである。

「無意識的用法」の早上がりの原因：「感情の高まり」, 「興奮のため」(声域の上限附近にまで達する) 早上がり型の「意識的用法」: 稍々とりすました, もっともらしい, 余所行きの話し振り。その発話が用意周到であることを表す。

「意識的用法」の早上がりの原因：「云うべき言葉が心にきまってから声が発せられるまでに若干の時間があるならば, その間に声帯の整備・緊張が完了する。そこで始めて発声するから, その発話の最初, 即ち第一モーラの発端部に於いてすでに十分上昇している(「無意識的用法」の時ほどは高くならないで, 並上がり型の第二モーラと同程度まで上る)」。

並上がり型: その発話が平靜な感情のもとに行われたものだと意味する。

「尚, 発話の第一モーラと第二モーラとが一つの音節として発音される場合には, 「並上がり型」の代わりに「早上がり型」の姿が現れることが屢々ある。例えば, 「大晦日」, 「交通巡査」が特に「早上がり型」としての意味を負わされていないにも関わらず

「オーミ'ソカ, 「コーツージュ'ンサ

という姿で発音されることがある。これは, 一音節内で上昇調を実現するという若干の困難を避けて発音を出来るだけ楽にするための手段に過ぎない。～所謂音声学的現象であると解せられる」。

遅上がり型の盛り込まれた感情:

- ① 驚きの気持ち, 納得のいきかねる気持ち, あきれた気持ち, 当惑した気持ち, 遠慮がちにものを云う気持ち
- ② 話題に上っている人或は話の相手に対し軽蔑の念を抱いていることを表す。

遅上がり原因: 「茫然自失, 不審, 当惑, 遠慮, 驚異, 驚嘆のあまり気力が失せ, 声を上昇させるという努力を早いうちに済ませてしまうことが困難である」ためによる。

3. 研究方法と研究資料

実際の発話を観察する場合, どのような発話を選ぶべきかが問題となる。例えばニュースを読むアナウンサーの声では, 一般の音読資料との違いがあまりないと思われる。日本語学習者にとっては, 会話の方が音読よりコミュニケーションの面で役に立つだろう。また対談番組も出現する発話のパターンが限られるであろう。そこで, ドラマを分析の資料とすることにし, 東京出身の出演者の多い『渡る世間は鬼ばかり』を選んだ。2000年10月5日からTBSテレビで放送された第5部の第2回～11回と2002年5月2日から放送された第6部の第5回～7回の放送で主に東京出身者¹⁾が出演し, セリフの中に跨拍上昇音の多いシーンを中心

に, テープに録音したセリフを文字化するとともに, 録音音声を「音声録聞見」(音声分析ソフト)で分析した。聴覚実験を行うため, 背景音や音楽, 他人の声が混入している部分及び単音レベルでの発音がはっきりしない部分を除いて, すべて拾い上げた。その上で前から500例の跨拍上昇音を単音レベルで切って, それらの跨拍上昇音が母語の中国語では何声に聞こえるかという聴覚実験を行った。台湾の留学生3名を被験者にした(意見の相違があるところは他の複数の留学生にも判断させた。曖昧なところは単音と全文節を聞かせ, 判断できるまで何回も聞かせることにした)。資料と他のデータとともに, Microsoft Excel で分析した。以下はそのセリフ(太字は採用された跨拍上昇音)とデータベースの一部の例である(もとのピッチ曲線については付録の図1～12を参照)。

渡る世間は鬼ばかり(第5部第2回より)

長子: 日向, **幼稚園**に連れて行ってきます。

タキ: あたくしお連れします。長子さん夕べも徹夜でしたでしょう。

長子: **英作**が帰ってこない夜はつい**頑張**っちゃってね。

タキ: おばちゃんと行きましょう。

長子: はい, 日向。どうも**すいません**。

タキ: 行ってまいります。

長子: 行ってらっしゃい。

大吉: 英作は夕べも泊りかね。

長子: 遊んで**外泊**しているんじゃないかって言いたいんだろうけど, まじめに**当直**してるの。ほかの医局員に代わってね。**本間**のお母さんが**英作**を無視して, 由紀ちゃん夫婦の**言いなり**になって, **本間医院**を建て直ししてることに**ショック**を受けているのよ。だから仕事に逃げているの。黙って見てあげるの**愛情**ってもんなの。

文子: おはようございます。ご無沙汰して**申し訳**ありません。

長子: そうよ。お父さん**心配**してたんだから。

大吉: いい加減なことを言うんじゃないよ。立派に独立してね。好き勝手なことしてる娘の**心配**なんか誰がするもんかい。

長子: ほら, 怒っているでしょう。**連絡**もないと**心配**してるから, 腹も立つの。

文子: 四月から受験勉強に追われててここに来る暇もなかったの。

長子: **電話**ぐらいできるでしょう。

文子: 旅行業務取り扱い主任者の資格を取る試験勉強しているなんて言ったら, またお父さんに余計な**心配**をさせるじゃない。だから, わざと黙ってたの。けど, 望がお父さんの料理を持って帰ってくれて, すごく慰められたの。お父さんのお

料理をおいしくいただきました。感謝しています。
 長子：だったら、お礼の電話ぐらいしなさい。

表1. 跨拍上昇音のデータベース

通し 番号	発話者 番号	発音 記号	音	単語	品詞	形	高低					文中 位置	前 音	強調 弱	
							差	W	H	R	N				M
1	NAGA1	有声	YO	幼雅園	名	斜昇	38	2	2	2			句頭	低	強調
2	NAGA2	有声	E	英作	名	平ら	20	1	1	1			文頭		
3	NAGA2	有声	CAN	強強	動名	平ら	-55	1	1	1			句中	低	融合
4	NAGA3	無声	SU	机椅子	副	斜昇	83	2	2	2			句頭	低	強調
5	NAGA4	有声	GAI	外泊	動名	平ら	0	1	1	1			句中	高	弱
6	NAGA5	無声	TO	当座	動名	斜昇	49	2	2	1	2	2	句中	高	強調
7	NAGA6	無声	HON	本間	名	平ら	-31	1	1	1			文頭		弱
8	NAGA6	有声	E	英作	名	斜昇	57	2	2	1	2	2	句頭	低	
9	NAGA6	有声	F	息吹	名	抛昇	109	1	1	1	1		句頭	低	強調
10	NAGA7	無声	HON	和服屋	名	抛昇	126	1	1	1			句頭	低	強調
11	NAGA8	有声	AI	愛情	名	平ら	13	1	1	1			句頭	低	弱
12	FUM1	有声	MO	申し訳	動名	抛昇	57	1	1	1			句頭	高	
13	NAGA9	無声	SN	心配	動名	抛昇	36	1	1	1			句頭	低	強調
14	NAGA10	有声	REN	運路	名	抛昇	45	1	1	1			文頭		
15	NAGA10	無声	SN	心配	動名	抛昇	25	1	1	1			句頭	低	
16	NAGA11	有声	DEV	電話	名	降昇	191	2	2	2			文頭		強調
17	FUM2	無声	SN	心配	動名	平ら	-19	1	1	1			句中	高	融合
18	NAGA12	有声	DEV	電話	名	抛昇	89	1	1	2	2	2	句中	高	

- 注1：品詞の欄について 名：名詞，動名：動作名詞。副：副詞，動：動詞。
 注2：形の欄について 斜昇：斜め上昇，抛昇：抛物線上昇，降昇：先端下降後に上昇，低昇：低音がしばらく持続した後上昇。
 注3：高低差の欄について 高低差の単位はヘルツ(Hz)，上昇する部分がないときには，値が0かマイナスになる。
 注4：声の欄について 英字は学習者の別を示す。数字は学習者の答え(跨拍上昇音を中国語の音感で何声と判断したのか)を示す。
 注5：文中位置の欄について 句頭：アクセント句の先端にある跨拍上昇音，句中：アクセント句の中にある跨拍上昇音，文頭：一文の始めにある跨拍上昇音。
 注6：前音の欄について 文頭の場合，文音調はリセットされたと考えられるので，前音を省略する。高と低の字は，前の語の最後の音がアクセント型で高音か低音かを意味する。
 注7：強調弱化的欄について 強調：はっきりとアクセント型が強調されたと判断できた場合。ピッチ曲線が文音域の上限付近に入り，前音との高低差が激しい。弱化的：前音と一続きに発音され，高低差が小さく，或いはピッチ曲線が低く抑えられた場合。融合：前音と殆ど高低差がない場合。ここでは弱化的の一種と見なしている。

4. 調査結果と分析

4.1. 調査結果

表1のデータベースの全資料を以下の表2にまとめた。

表2. 跨拍上昇音のデータベースのまとめ

		斜昇	低昇	降昇	平ら	抛昇	下降
句中	前音高	語頭	強調	3			
		中間		1		7	4
		無声	弱化的			24	4
		合計	3	1	0	31	4
		語頭	強調	1			1
		中間	2	1		3	4
	有声	弱化的			30	3	
	合計	3	1	0	33	8	
	前音低	語頭	強調				
		中間				2	1
		無声	弱化的			13	1
		合計	0	0	0	15	1
語頭		強調					
中間			1		1	2	
有声	弱化的			8	1		
合計	0	1	0	9	3		
句頭	前音高	語頭	強調	4			
		中間		2	1	10	2
		無声	弱化的			1	
		合計	4	2	1	11	2
		語頭	強調		1	1	1
		中間	3	2	1	3	5
	有声	弱化的			1		
	合計	3	3	2	5	6	
	前音低	語頭	強調	15	3	1	7
		中間	6	6		35	24
		無声	弱化的			8	2
		合計	21	9	1	43	33
語頭		強調	32	3	1	9	
中間		19	5	1	21	34	
有声	弱化的			6	2		
合計	51	8	1	28	45		
文頭	語頭無声	強調	11	2		3	
		中間	2	2		18	
		弱化的			2	6	
	合計	13	4	0	20		
	語頭有声	強調	3	3	4	1	
		中間	1	1	1	17	
弱化的				2	11		
合計	4	4	5	20			
総計		102	33	10	215	124	16
第2声に聞える例数		93	33	10	7	36	2
第2声に聞える比率		91%	100%	100%	3%	29%	13%
強調		69	12	6	3	23	2
弱化的		0	0	0	95	8	5

注：空白セルの値は0である。中間は強調と弱化的に判定できなかったもの。
 表を簡潔にするため，斜昇の中に微斜昇，平らの中に微昇，下降の中に微降の例数を含む。

まず形の分類について説明する。音読み単語の場合は，比較的ゆっくり読まれるので，語頭の上昇もきれいな抛物線“∩”になることが多い。しかし，会話の場合は，話のスピードが速く，プロミネンスも付けられるため，抛物線の上昇部分だけが伸ばされ，平らな高部がなくなる場合が多くなる。そのため，別に「斜め上昇」つまり「斜昇」“/”の分類を立てた。「抛物線上昇(以下抛昇)」と「斜昇」とは，上昇部分の長さ，角度と平ら部分の長さによって分類する。また音がしばらく低く続いた後，上昇するパターンも見られたので，「低昇」“∪”の分類を立てた。平らな跨拍上

昇音の後部はもともと下降する傾向があり、下降の度合いが大きい場合は「下降」に分類した。「平ら」に分類した跨拍上昇音も完全に平らなものだけではなく、少々の凹凸があっても、ピッチ曲線の大部分が平坦な場合は「平ら」の分類に入れた。

次に中間の判定について説明する。今回の調査では、はっきりと強調と弱화에判定できたものにはしか印を付けなかった。印のついていないものはすべて中間に分類したが、実はその中には様々な程度の強調と弱化が存在している。例えば、表1の8番と18番は相当の上昇と高低差とがあるが、文全体のアクセント句の山と比べて中程度の上昇なので、強調の分類に入れなかった。(付録図5 NAGA6「英作」、図12 NAGA12「電話」を参照)

4.2. 会話文における跨拍上昇音のピッチ曲線の形

音読み単語の場合、確かに語頭有声の跨拍上昇音のピッチ曲線は拋物線上昇型、語頭無声は平坦型が主流であるが(佐藤1993, 王1999, 2000, 2001を参照)、実際の生き生きとした会話文では異なるピッチ曲線の傾向が見られた。形に関して表2から分かることは以下のようにまとめられる。

- ① 語頭無声と有声はピッチ曲線の形を決める要因ではなく、アクセントの強調と弱화가ピッチ曲線にもたらす影響が最も大きい。
- ② 強調する時は、斜昇が一番多く使われ、次は拋昇である。
- ③ 弱化する時は主に平らが使われ、斜昇、低昇、降昇は使われない。拋昇もあまり使われない。
- ④ 下降は語頭無声の跨拍上昇音にしか現れない。
- ⑤ 降昇はアクセント句の「句中」には現れない。

4.3. 中国語の第二声のように聞こえる比率と要因

今回の調査ではサンプルになった跨拍上昇音を意図的に操作、選出していないので、500例のデータは単純無作為抽出によると見なされ、テレビドラマの中の、どれぐらいの跨拍上昇音が中国語の第二声のように聞こえるかが推測できる。計算を簡単にするため、被験者6人中1人でも2(第二声), 1・2(第一声と第二声の間), 単1全2(単音だけ聞いた時には第一声に聞こえるが、全文節の時は第二声に聞こえる)と答えれば、すべて第二声に聞こえる可能性があると見なし、「第二声に聞こえる例数」の計算に入れた。その結果、500例の跨拍上昇音のうち、第二声に聞こえる可能性があるのは全部で181例、比率は36%である(6人中で1人でも違う答えがある場合を不一致と見なすと、一致率は87%であった)。ドラマの場合、対談番組よりも感情の現れが激しいので、3分の1程度の跨拍上昇音が中国語の第二声に聞こえることになるが、冷静な

対話やニュース放送はそれ以下だと予測される。

日本語の典型的な跨拍上昇音のピッチ曲線のパターンは“—”平坦型と“∩”拋物線上昇型なのに、何故中国語の第二声に近いと聞こえるものがあるのか。それは中国語の第二声に聞こえる要素とかがわりがある。中国語の典型的な第二声のピッチパターンは“∩”先端下降後上昇型(降昇)で、しかも、低音の部分が大事である。そのため、次の音節の先端部分のピッチと少々落差があり、上昇せずに平らな低音の部分があるだけで、第二声に聞こえるのである。前回(王2001)台湾在住の中国語話者の中国語音訳単語資料にはそのような第二声があった(付録図13 CSEC40 *téi-bū lǔ kǔ lǒu sǐ* を参照)。中国語の第二声は上昇すると同時に声が段々弱くなる。従って、上昇の部分がなくても、次音節とのピッチの落差があれば、我々の耳が自動的にその間のピッチ曲線を補ってくれる。このようなことは速いスピードで交わされた日常会話ではよく現れる現象ではないかと思われる。この原因によって、ピッチ曲線が平らにもかかわらず、第二声に聞こえるものが今回のデータでも3%ある。また拋物線上昇も上昇の部分が大きければ、低いところから上昇する可能性が高くなる。今回のデータの中にも拋物線上昇で第二声に聞こえるものが29%ある(表1の18番と表2を参照)。斜昇はもともと拋昇から変化したもので、拋昇との区別は上昇と平ら部分の長短の違いによる。斜昇は拋昇より上昇部分が長く、平らな部分が短く、91%の比率で学習者に第二声のように聞こえた(第二声に聞こえなかった9%の斜昇は高い所から更に上昇するものなので、学習者には第一声のように聞こえた)。降昇“∩”と低昇“∩”はもともと中国語の第二声のピッチ曲線「先端下降後上昇型(降昇)“∩”」と最も似ているのですべてが学習者に第二声のように聞こえた。下降に分類された一部の跨拍上昇音(もとの分類は微降)は下降程度が大きくなく、しかも次音節の先端とピッチの落差があるので、約13%が第二声のように聞こえた。

以上の分析から分かるように、日本語の跨拍上昇音が中国語の第二声のように聞こえる原因は低音部分の有無と上昇する幅の大きさによるものである。

音読み単語の場合、語頭無声と有声は跨拍上昇音が上昇するかどうかの決め手となっている。しかも、同じ音読みの方法で日本語の単語全般について調べた佐藤(1993)にも、「日本語の有声子音は低いトーン素性を有する」、「無声子音の場合には、～後続する母音のピッチを高める傾向がある」という指摘がある。筆者は音読み単語²⁾(語頭有声は38語、語頭無声は38語)の聞きについても4人の東京語話者(A~D)の発音を対象に予備的な調査をしたが、語頭有声の跨拍上昇音のほうが中国語の第二声に聞こえやすいと言える(表3を参照、聞き手は筆者自身)。

表3. 音読み単語の跨拍上昇音の聞え

音読み単語番号		A		B		C		D	
		有声	無声	有声	無声	有声	無声	有声	無声
跨拍上昇音 第二声に聞える	例数	12	0	8	0	27	13	21	1
	比率	32%	0%	21%	0%	71%	34%	55%	3%

しかし、会話文になると語頭の無声有声より強調する意思の強さによって、跨拍上昇音の形と上昇する幅が決まる。今回、会話文中の500例の跨拍上昇音で、語頭無声は244例、うち第二声に聞こえるのは71例(29%)、語頭有声は256例、うち第二声に聞こえるのは111例(43%)になっており、違いはあまりなかった。各ピッチ曲線の形も語頭無声か有声の要素による例数の差は殆ど見られなかった(表2を参照)。

4.4. 各ピッチ曲線の形の用法と表された感情

4.2と4.3節の分析から分かるように、会話文になると語頭の無声有声より強調する意思の強さによって、跨拍上昇音の形と上昇する幅が決まる。各ピッチ曲線の形がどのように用いられ、どのような感情が含まれているのか、川上(1956)の論点を参照しながら、各ピッチ曲線の形ごとに会話文例を分析してみた。今回のデータを分析した結果、跨拍上昇音に関して、川上の論点と一致しない点がある。以下具体例を提示しながら、詳しく説明する。

① 低昇と降昇：主に強調する時に使われる。各会話文例の文脈から見れば、低昇と降昇に現れた感情は、川上(1956)の言う遅上がり型に含まれるものに近いと思われる。今回低昇のデータでは、あきれた気持ち、当惑した気持ち、低昇を使った語の表した内容及び人やものに軽蔑の念を抱いていることを示す例が観察された(以下該当字を太字で表す)。

あきれた気持ちの例：

聖子：店を継がないから、店のことは関係ないって、愛ちゃんも真ちゃんも知らん顔でしょう。**そんな**のおかしいですよ。

当惑した気持ちの例：

五月：急に決まった仕事を断って、**大丈夫**なの？その語の表す内容に軽蔑の念を抱いている例(この種の例が多い)：

由紀：お兄ちゃんは高いお給料をもらってるのよ。**マンション**ぐらい借りられるでしょう。

また、低昇が低音から始まることから分かるように、この単語を発語した際、あまり元気がなく、相手に説明するのも面倒くさいと思いつつ我慢して説明しているような気持ちも会話例の中にたくさん見られた。

大吉：何だよ。今起きたのか。

長子：夕べも**英作**帰ってこないんだもの。どうしても夜遅くまで仕事をしちゃうよね。

降昇も主に強調する時に使われる。低昇と同じく、その単語の表す内容について軽蔑の意味を抱いている例が10例の中の4例に見られる。その他の例では「そんなことも分からないの」という気持ちをこらえながら、元気なさそうに説明している感じがある。しかし、500例中、降昇が使われたのは10例しかなく、中国語の第二声と最も近いピッチ曲線ではあるが、日本語ではあまり使われていない音調だと言える。

その語の表す内容に軽蔑の念を抱いている例：

長子：事情もへちまもないわよ。無断外泊なら許せる。けど当直だって理由つけて、外泊するなんて明らかに意図的にあたしを騙しているんじゃない。やましいことがある決まっているわよ。

大吉：やましいことかどうか、もっとほかに言えない理由があつて、嘘をつかなければならなかったかもしれないだろうが。

長子：ほかにどんな理由があるって言うのよ。**女**に決まっているわよ。

元気なさそうに説明している例：

亨：そんなことをしていると、体壊してしまうぞ。
文子：**大丈夫**よ。自分でやりたいことをやっているんだもの。ひさしぶりに毎日が充実しているのが楽しいんだよ。病気なんてなるわけないでしょう。

② 斜昇：主に強調に使われる。単にその単語がはっきり相手に聞き取れるようにするために使われる。また、強調の度合いによって上昇の幅が異なる。強調と判定されなかったものでも、程度差はあれ、斜昇は強調を表す主要手段だと言える。川上(1956)の分類から言うと、早上がり型の「無意識的用法」-「感情の高まり」、「興奮のため」(声域の上限附近にまで達する)に近いと考えられるが、「びっくりした」含意はない。

強調の例：

長子：**そんな**の理由にならないわよ。**本間**医院を捨てたのは**英作**なのよ。

③ 平ら：川上(1956)の「その発話が平静な感情のもとに行われた」ことを含意する並上がり型に相当すると思われる。程度副詞、形容動詞などを強調したくない時(強調すると、かえって大きな感じがする)、敢えて平らの跨拍上昇音を使う傾向がある(付録図14 MITUK4「十分」、「丈夫」を参照)。固有名詞が言及された時、「平ら」の音調が使われ

る例がたくさん見られた。全文が激しい音調で発話されるにもかかわらず、文頭句頭の人名が平らな音調、中ぐらいの音域で発話される例が目立つ（付録図5 NAGA6を参照）（もちろん、人名が強調されないわけではないが、ほかの形より例が多い）。

弱化の時も平らな音調がよく使われる（付録図11 FUMI2「心配」を参照）。

ほかに前音と一続きに発話される場合も平ら（或は下降）音調が使われる。

わざと強調したくない例：

五月：無理よ。夜お店手伝って、朝4時に起きて、お弁当の包装に出てるでしょう。寝る時間ないじゃない。

光子：お店が終わって、10時に帰ったら、5時間寝られます。十分です。若くて丈夫なのを取り柄ですから。

人名の例：

長子：本間のお母さんが英作を無視して、由紀ちゃん夫婦の言いなりになって、本間医院を建て直ししていることにショックを受けているのよ。

弱化の例：

文子：旅行業務取り扱い主任者の資格を取る試験勉強しているなんて言ったら、またお父さんに余計な心配をさせるじゃない。だから、わざと黙ってたの。

前音と一続きに発話される例：

由紀：よく言うわ。お兄ちゃんが本間の家を継ぐ気がないから、私に本間医院を頼むって頭を下げるのは母さんのよ。

④抛昇：川上（1956）の分類には該当するものがなさそうだが、強いて言えば、並上がり型に近いと思われる。平ら音調とともに、跨拍上昇音によく使われる典型的な音調である。平ら音調と違うところは、抛昇の音調を使う場合、話者のある程度の元気或は気持ちの明るさが伝わってくることである。従って、「こんにちは」のような挨拶文には抛昇のほうが適している。抛昇の上昇程度が大きければ、強調音調になる可能性もある。

気持ちの明るさの例：

勇：うちの弁当はどこへ行っても、評判いいよ。

⑤下降：下降音調は語頭無声の跨拍上昇音にしか現れないが、244例の語頭無声跨拍上昇音のうち、16例の下降音調しかない。前音と融合して、下降するものを除くと、残りの例はどうやらその言葉の表している意味に対する沈んだ気持ちを反映しているようである。例えば、「心配」、「深刻」、「急に」など。「心配」の例はほかの形の音調もあるが、13例中の9例が下降か平

らな音調である。これは恐らく語意の反映ではないかと思われる。因みに、川上（1956）の分類には該当するものがないようである。

前音と融合している例（前者）と沈んでいる気持ちの反映の例（後者）：

五月：真、この間まで一流の大学入りたいって、高校も一流の進学校行くなって、塾もそういう高校を目指しているところ自分できめて、けっこう真面目に通ってたでしょ。それを急にやめると言い出して、

以上の分析で分かるように跨拍上昇音の強調程度は斜昇>抛昇>平ら・のようになっている。しかも、各ピッチ曲線の形は、話者が跨拍上昇音が含まれた語を言う時、その語意に対する気持ちの反映だということが明らかになった。

5. 日本語教育への応用

以上の分析を通して、中国人学習者に対して跨拍上昇音をどのように教えたらいいかを考える。

李（1997）によると、香港の日本語学習者が広東語にある「上がり調」の発音法を極端に応用することを避けるために、香港中文大学では跨拍上昇音のアクセントについて1拍目から高音の線（例：「電話」）を引いて教えるという。しかし、今回の調査結果の通り、実際の会話では中国語第二声に聞こえる可能性のある跨拍上昇音は36%も存在しているので、跨拍上昇音をすべて平らな音調で学習者に教えることも、また行き過ぎであることになる。

王（1999, 2000, 2001）から分かるように、授業で跨拍上昇音の単語を音読みする場合、語頭無声を平らで、語頭有声を拋物線上昇で読めば、東京語話者に最も近い読み方になると思われる（普通に文を音読みする時も、同じ原則を適用するが、自然な文音調一大きい“へ”の字型のアクセント句の山から小さい山へと気を配りながら読むことが大事である。もし、プロミネンスを付ける必要がある時は、会話文中の跨拍上昇音の原則を適用する）。

会話文に入ると、跨拍上昇音が上昇するかどうか、また上昇する幅も強調する意思の強さによって決まる。その語を強調する意思の強さによって、斜昇、抛昇、平らの順に使われる傾向がある。

その語の表す内容に軽蔑の念や当惑の気持ちなど、言外の意味がなければ、降昇と低昇を使うべきではない。つまり、中国語の第二声のように低音の部分を下降後しばらく持続させてから、上昇するのではなく、低音からすぐ上昇してしまうか、或は中音から上昇するか、或は1拍目から平らなままでその語を言うかの

3通りの発音方法が東京語話者に近いのである。

以上の会話文の調査によって、自然な日本語の音調を習得するために、日本語の跨拍上昇音を単に中国語の第一声或は第二声で代用するのは無理があることが明らかになった。

【参考文献】

王曉青 (1999) 「日本語語頭の拍に跨る上昇音について」『台湾日本語学報』14
 王曉青 (2000) 「中国語の四声と日本語の東京アクセントの対照研究—日本語アクセントの高低感覚に関する指導のために—」『台湾日本語学報』15
 王曉青 (2001) 「台湾上級日本語学習者における日本語アクセントの音声・音響的特徴について—日中両語のアクセントの高低との比較から—」『台湾日本語学報』16
 川上 夔 (1956) 「文頭のイントネーション」『国語学』25 『日本語アクセント論集』1995年汲古書院再録
 川上 夔 (1957a) 「準アクセントについて」『国語研究』7 国学院大学 『日本語アクセント論集』1995年汲古書院再録
 川上 夔 (1957b) 「東京語の卓立強調の音調」『国語研究』6 『日本語アクセント論集』1995年汲古書院再録
 郡史郎 (1994) 「強調とイントネーション」『講座日本語と日本語教育』2 杉藤美代子編明治書院
 郡史郎 (1997) 「日本語のイントネーション—型と機能—」『日本語音声2 アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』国広哲弥他編 三省堂
 小林隆治 (1963) 「音調分析に基づくアクセントの新表記法」『音声学会会報』113
 佐藤大和 (1993) 「プロソディーの生成」『日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究』D1 班研究発表論集文部省重点領域研究平成4年度研究成果報告書 水谷修他編
 前川喜久雄 (1998) 「音声学」『岩波講座言語の科学2 音声』岩波書店
 李活雄 (1997) 「香港における日本語の音声教育」『21世紀の日本語音声教育に向けて』研究代表者水谷修新プロ「日本語」研究班3 平成8年度研究報告書

付 録

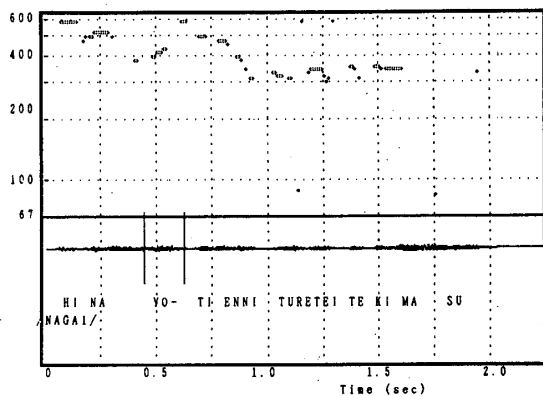


図1. 長子：「日向，幼稚園に連れて行ってきます」のピッチ曲線

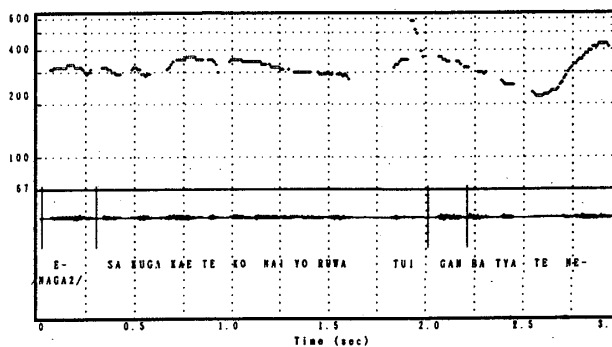


図2. 長子：「英作が帰ってこない夜はつい頑張っちゃってね」のピッチ曲線

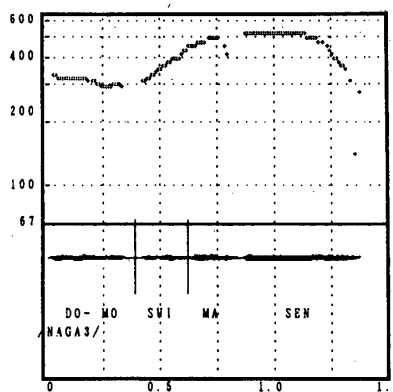


図3. 長子：「どうもすみません」のピッチ曲線

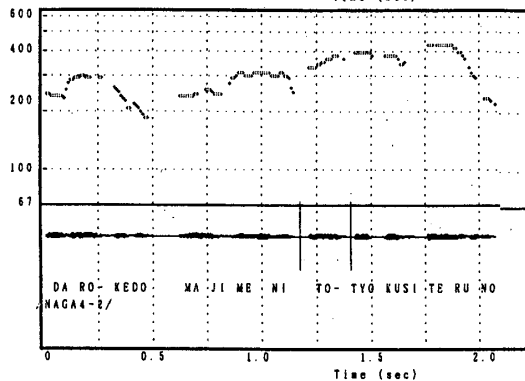
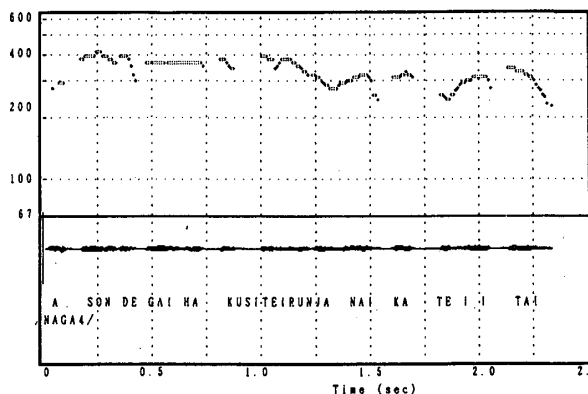


図4. 長子：「遊んで外泊しているんじゃないかって言いたいんだろうけど、まじめに当直してるの」のピッチ曲線

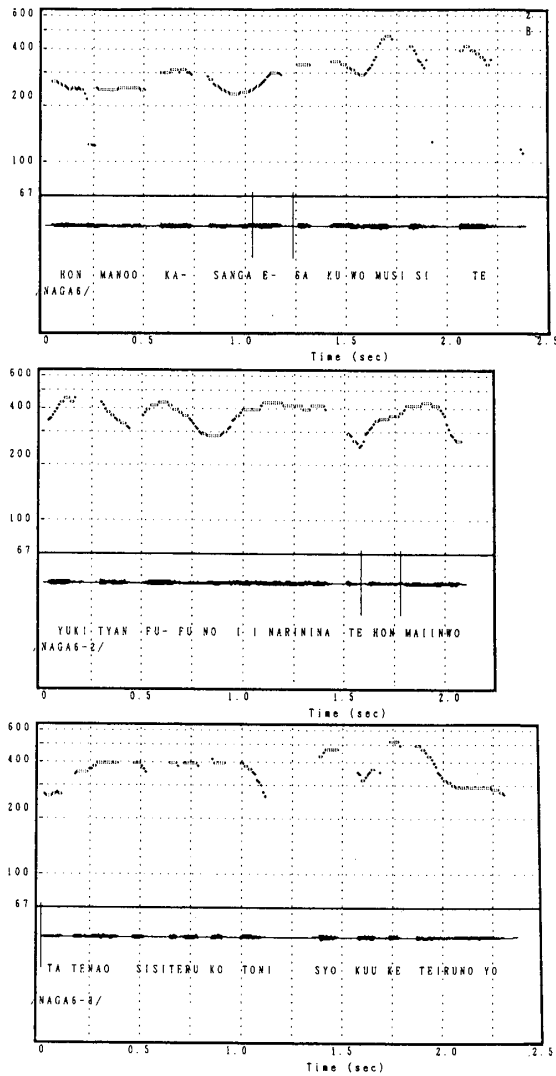


図5. 長子：「本間のお母さんが英作を無視して、由紀ちゃん夫婦の言いなりになって、本間医院を建て直していることにショックを受けているのよ」のピッチ曲線

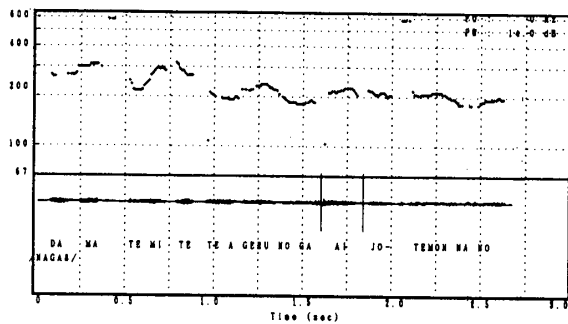


図6. 長子：「黙って見ててあげるのは愛情ってもんなの」のピッチ曲線

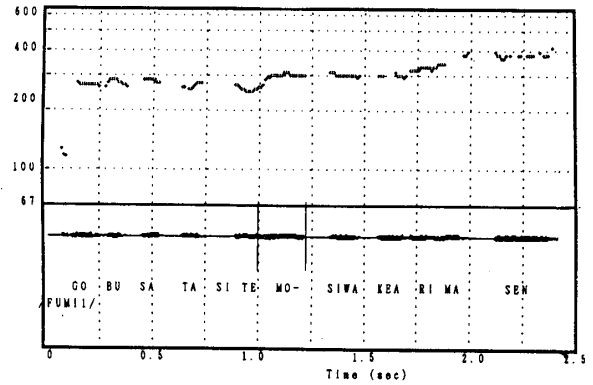


図7. 文子：「ご無沙汰して申し訳ありません」のピッチ曲線

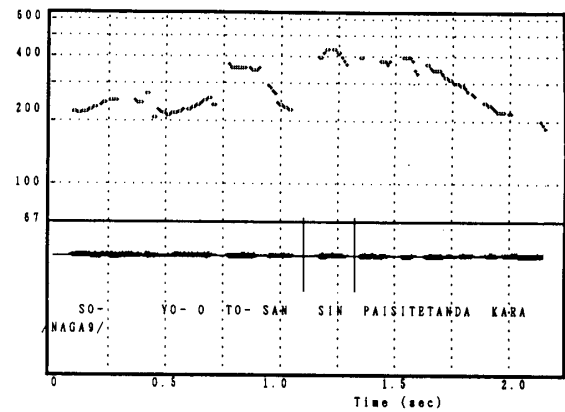


図8. 長子：「そうよ。お父さん心配してたんだから」のピッチ曲線

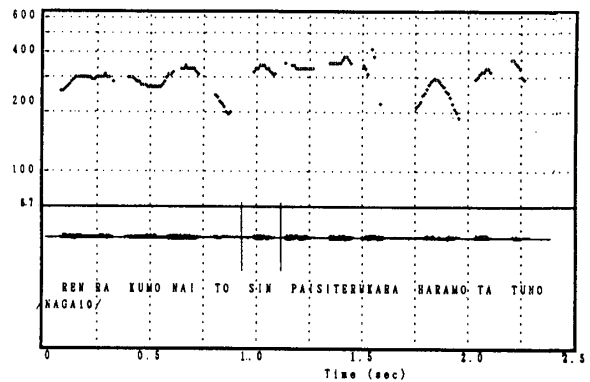


図9. 長子：「連絡もないと心配してるから、腹も立つの」のピッチ曲線

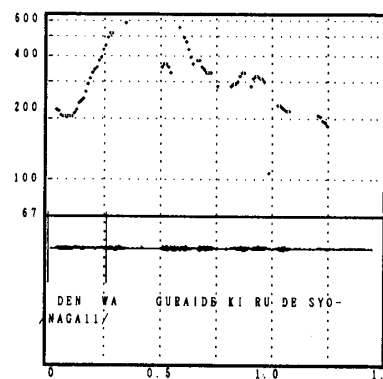


図10. 長子：「電話ぐらいできるでしょう」のピッチ曲線

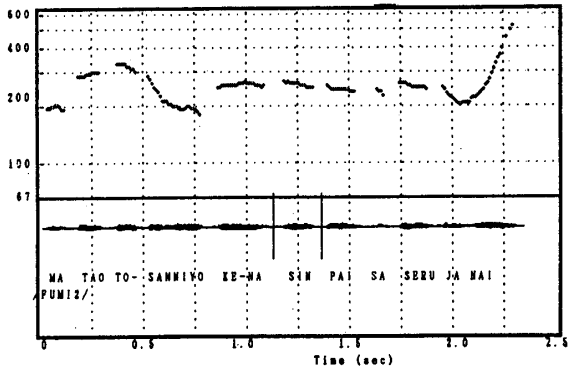


図11. 文子:「またお父さんに余計な心配をさせるじゃない」のピッチ曲線

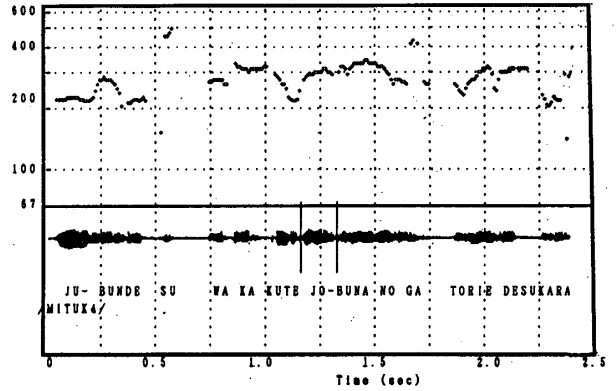


図14. 光子:「十分です。若くて丈夫なのが取り柄ですから」のピッチ曲線

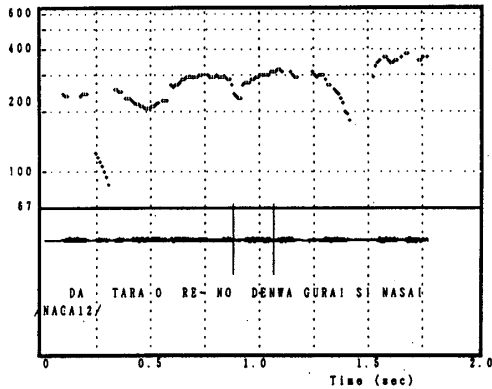


図12. 長子:「だったら、お礼の電話ぐらいしなさい」のピッチ曲線

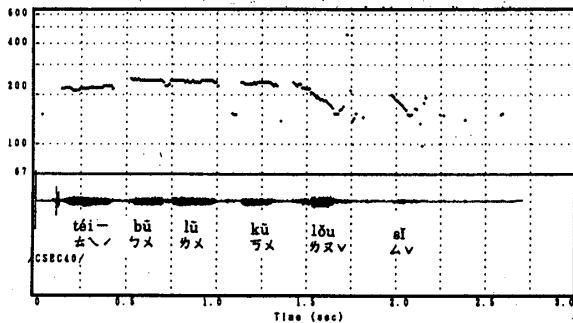


図13. 台湾在住の中国語話者CSEの中国語音訳単語「tái- bǔ lǚ kǔ lǒu sǐ」のピッチ曲線

【注】

- 録音資料の東京語話者は全部で13人、女性10名、男性3名で、登場回数にはばらつきがある。録音資料に採用された出演者の役名と芸名は以下の通り。本間長子-藤田朋子、高橋文子-中田喜子、小島五月-泉ピン子、小島愛-吉村涼、小島真-えなりかずき、小島勇-角野卓造、野々下邦子-東てる美、本間由紀-小林綾子、松田聖子-中島唱子、秋葉満枝-木の実ナナ、秋葉和夫-倉田てつを、小島加奈-上戸彩、山下光子-奥貫薫。
- 予備調査の音読み単語は以下の通りである。
カーネーション、ちいさい(小さい)、くうこう(空港)、せいじ(政治)、せいせい(清々)、おうさま(王様)、かんじ(感じ)、しんよう(信用)、うんよう(運用)、れんらく(連絡)、そんな、マーマレード、テーブル、テーブルクロス、テープレコーダー、ペンキ、ペンフレンド、インフレ、インフォメーション、コーヒー、コーディネーター、らんぼう(乱暴)、だんぼう(暖房)、たんぼ(田圃)、ピンぼけ、びんぼうぐらし(貧乏暮らし)、らいこう(来校)、だいこう(代講)、たいこう(対抗)、なんこう(難航)、あいこう(愛好)、ろうがん(老眼)、どうがん(童顔)、とうがん(冬瓜)、ちゅうしん(中心)、しゅうしん(就寝)、じゅうしん(重心)、つうしん(通信)、めいしん(迷信)、ようし(用紙)、はいしん(背信)、ばいしん(陪審)、しょうがく(少額)、ぞうがく(増額)、そうがく(総額)、にゅうがく(入学)、きょうせい(強制)、ぎょうせい(行政)、きんせい(金製)、ぎんせい(銀製)、まんせい(慢性)、えいせい(衛生)、かいかん(会館)、がいかん(外観)、みんかん(民間)、ボール、ボール、ほうる(放る)、けいだい(慶大)、げいだい(芸大)、けんきゅう(研究)、げんきゅう(言及)、とうそう(逃走)、どうそう(同窓)、ゆうそう(郵送)、ワイシャツ、ふんまつ(粉末)、ぶんまつ(文末)、ぶんぶん(怒る)、せんぱい(先輩)、ぜんぱい(全敗)、せんぱい(千倍)、せんでん(宣伝)、どうじょう(同情)、いんぜい(印税)、だんねつざい(断熱材)

(主任指導教官 沼本克明)